
磁竜の滅竜魔導士

JUMP UP !

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

磁竜の滅竜魔導士

【Nコード】

N2883BA

【作者名】

JUMP UP！

【あらすじ】

ワンピースのユースタス・キッドが海賊ではなくもしフェアリーテイルの滅竜魔導士だったらというのはなしです

プロローグ（前書き）

どうもJUMP UP!です、前々から書いてみたいと思っていた作品ですどうぞ楽しんでみてください

それではどうぞ！

プロローグ

ここはマグノリア駅の車内の中

「ちょっと、ナツ大丈夫？」

「うつつ・・・むり・・・うつ・・・もう・・・ダメ・・・」

乗り物酔いで気持ち悪くなっている桜色の髪の少年ナツ

「まあ、だから付いてこなくていいって言ったのに、なんでついて来んの？」

呆れたように問いかける金髪のロング少女ルーシィ

「あい！それがナツです」

陽気な青いしゃべる猫のハッピー

今、彼たちはルーシィの買い物帰りの電車の中だったとその時電車のドアがドン！という騒音とともに一人の銃を持った男が車内に入り込んできた。後ろにはもう三人ほど銃をもった男がいる、さっきまで普通に乘っていた客もこの状態に驚いたのか一気にざわめきだした。するとバンツ！という鈍い音が車内に響き渡った。一人の男が天井に向け発砲したのだ

男A「この電車はわれわれがハイジャックした！」

男B「お前たちには人質になってもらうぞ！」

男C「少しでも抵抗したりしたらすぐに撃ち殺す」

男D「わかつたら大人しくしろ」

男たちそう言い放つと乗客たちは一斉に静まりかえった

「ちょっとナツ、なんとかしてよ！」

「うつ・・・うえ・・・だめ・・・ちからが・・・でねえ」

「もおゝしっかりしてよ！」

「ルーシィ、オイラたちどうなっちゃうの？」

「私だって分かんないわよ！」

男B「おい！お前ら何騒いでんだ！ほんとに撃つぞ！」

「ひいつ！」

ルーシイたちがターゲットにされたそのときだった

「おい」

後ろのほうから声がした、そこには赤髪の男が立っていた。その後ろには群青色をした二足歩行の猫もいた

男B「ああん？なんだお前殺されてーのか？」

と、男Bが銃を突き付けたが、赤髪の男は全く動じなかった

「おめえらさつきからうつせえんだよ、せつかく寝てたのに目覚めちまつたじゃねエか、てめえただで済むと思うなよ！」

と赤髪の男は男Bに怒鳴りかけた

「ちよつと！あんまり挑発しないでよ・・・」

とルーシイが震えた声で赤髪の男に言った

男B「てめえ調子のとてんじゃねえぞ！」

と再度銃を突き付けようとしたが、男Bの銃が宙に浮かんだ、他の男たちが持っていた銃も宙に浮かんだ

男A「・・・え？」

男B「どうなつてんだ？」

男C「なんで勝手に？」

男D「・・・？」

と、男たちは不思議そうに宙に浮かぶ銃を見つめていた

「ちよつと！ちよつと！なにがおきてるわけ？」

「あい？」

「ううう・・・」

と、ルーシイたちもビックリしながら銃を見つめていた

するとその銃はきれいな放物線をえがいて赤髪の男の手に収まった

「おめえら、覚悟できてんだろうなあ」

と、赤髪の男が鬼のような形相で男たちを睨みつけた

「「「ヒイイ！！」「」「」

男たちは驚きながら逃げようとした、その時

「^{リベル}反発」

赤髪の男がそうつぶやいたと思うと手に持っていた銃がものすごい勢いで彼の手を離れ男たちの背中に思いっきり当たった

「……グッ!」「」「」

と、男たちは声をあげその場に倒れこんだ

「「すごい」」

ルーシィとハッピーは声をそろえてビクビクしていた

「雑魚がいきがってんじゃねえよ、ムナクソわりいやつらだぜ」

「キッドくやりすぎだよ」

「いいんだよこれくらいやるときゃ、いくぞテララ」

「テラ!」

そうして、群青色の猫と赤髪の男は去って行った

「誰なんだろうね?ルーシィ」

「さあ、ただ、タダものじゃないってことは確かね。」

「もしかして魔導師かな?」

「うん、多分そうだと思う」

「あと、しゃべる猫もいたよ、びっくりしたね」

「あんたがいうのはどうかと……」

「うつつぶ……?」

その後、電車をハイジャックしようとした男たちは駅のホームの警備員たちにより取り押さえられた。

プロローグ（後書き）

ひとまずはこんな感じですよ話的にはウエンディ達が入りたてくらい
の話です

プロフィール（前書き）

どうも、今回はキッドとテララのプロフィールです

それではどうぞ

プロフィール

主人公設定

名前：ユースタス・キッド

年齢：？

性別：男

紋章：左肩（黒）

身長：192cm

体重：85kg

好きな物：ケンカ

嫌いな物：気に入らないやつ

魔法：磁竜の滅竜魔導師

性格：荒々しくて極悪非道

声：浪川大輔

人物

とても荒々しくて喧嘩好きの極悪非道者。気に入らないやつは片っぱしから叩きのめすが。仲間には害を与えない。鼻がよくきき「殺戮の磁竜」という異名を持つ

見た目は、逆だった赤髪にゴーグルを着用しコートの袖を片方だけ通して羽織っている、目の色は赤で目のふちと口、ツメを赤紫色でぬっている

磁竜の滅竜魔導師で体を自由自在にS極にしたりN極にしたり出来

る「磁石人間」である。親代わりだった竜の名前は“キラー”。磁石を食べることができる

技

磁の滅竜魔法

・磁竜の鉄腕てつわん

うでに鉄をくつつかせ大きな鉄の塊にする

・磁竜の散鉄さんてつ

腕に付いた鉄を一気に離す

・磁竜の反発はんぱつ

触れずに鉄を跳ね返す

・磁竜の咆哮ほうこう

強力な磁力がはっせいし、ありとあらゆる機会を狂わすことができる

滅竜奥義

・閻魔えんま・狂鋭磁雷きやうえいじらい

相手の足もとに地中に埋まっている鋭利な凶器をだす

・閻魔えんま・磁獄豪手じごくごうしゅ

腕に鉄がくつつき大きな手になる

昔閻ギルドに入っていたが、ギルドのやり口や雰囲気気が気に食わなかったなので、ギルドを脱退したが、キッドの実績が良かったことから、閻ギルドのマスターがそれを許さなかったらしく未だにキッドとテララを探している。紋章は消されている

キッドの相棒

名前：テララ

年齢：6歳

身長：48・6cm

紋章：背中（黄）

見た目：ケロロ軍曹のテララを猫にした感じ

性格：天然

口癖：「テラ」「テ〜ラ〜ラ〜」

好きな物：魚

嫌いな物：ニンニク

魔法：翼^{エーラ}

声：大谷育江

人物

キッドが昔“キラー”に育てられていたところに見つけた卵をキッドが大事に育ててその中から出てきた猫、とてもキッドになつていていつもくつついている。完全に離れ離れになってしまうとさみしくなつて、たまに泣いてしまうこともある。

翼^{エーラ}がつかえて、キッドを運んだりしたり歩くのが疲れた時などによく使う

体の色が群青色で青いベレー帽のようなものをかぶっている、目の色はオレンジ色

天然でたまに爆弾発言をしたりする。また魚が好きでよくハッピーと取り合いになる、それに対しニンニクが嫌いで絵に描いたニンニクでさえも見たら気絶してしまうほど嫌い

プロフィール（後書き）

また変更があたりかえますので

フェアリーテイル！（前書き）

やっと本文に入ります

それではどうぞ

フェアリーテイル！

「たっだいまー！ー！！！」

「お帰り、ナツ、ルーシィ、ハッピー」

きれいな顔立ちをした銀髪の女性ミラージュン

「づがれだ」

「あらどうしたの？ルーシィ」

ミラがルーシィに声をかけたがその時にはもうぐったりしていたので、かわりにハッピーが答えた

「実はね電車の中で銃を持った男たちがいきなり入ってきてハイジャックしたんだよ」

「あらあら、それは大変だったわね、それでどうなったの？」

「そしたら、赤い髪の毛の男の人がいきなり現れて男たち全員まとめて倒しちゃったんだ」

「赤髪の男？」

「あい！」

「なんだハッピーそんなことがあったのか？」

「あんたはいいわよね、ずっと酔ってたから」

と、ぐったりした声のルーシィがつっこんだ

「しゃーねーだろが、乗り物にがえなんだから」

「まあまあ」

その場を落ち着かせるミラ

「ナツさん達おかえりなさい」

青い髪の少女ウエンディ

「まったくこりないわね、あんたち」

しゃべる白い猫シャルル

「ウエンディ、シャルル、ただいま」

ルーシィはウエンディとシャルルに挨拶をした

「それにしても、その男何者なの？」

と、さっきの話を聞いていたらしくシャルルはルーシーに問いかけた
「さあ、わかんないけど、タダ者じゃないみたいなのは確かだと思
う」

「うおおおお、戦ってみてええ!!!」

と、火をふきながら騒ぎ出すナツ

「ナ、ナツさん落ち着いてください」

ウエンディがナツを止めにかかった

その時だった、ギルドハウスのドアがバン!という音とともに勢いよく開けられた、そこにはさっき電車にいた赤髪の男と群青色の猫が立っていた

「アイツ!」

ルーシーが驚いたような声をあげた

「どうしたの?ルーシー」

ミラがルーシーに問いかけた

「アイツだよ、ミラさん電車にいた赤髪の男!」

ルーシーがミラに説明した

「うるせえギルドだなあ、なあテララ」

「そういうことは言わないほうがいいよ、キッド」

「んだよつれねえなあ」

と赤髪の男と群青色の猫が話していた

「おい、その銀髪のねえちゃんここのマスターはどこだ?」

男がミラに問いかけた

「マスターならそこに座ってるわ、あと私はミラジューンよ」

「そうかい、あんがとよミラ」

「ええ」

そうして男がマスターの前に立った

「ん?おぬし何者じゃ?」

フェアリーテイルのマスターマカロフ

「俺は、キッドだユースタス・キッド、俺をこのギルドに入れてくれねーか？」

「なんじゃそんなとか、いいにきまつとるじゃろうが」

マカロフはそういうとミラを呼んだ

「紋章はどこに付けてほしい？」

大きなハンコをもつてニコツと笑うミラ

「んじゃあ、左肩に頼む」

と、いつてコートの袖を通していない右肩を出した、ポン！と黒色のハンコがキッドの左肩に押されフェアリーテイルの紋章が刻まれた
「やったわね、これであなただもフェアリー映ルの一員よ」

そうしてまたニコツとほほ笑むミラ

その後テララも背中に黄色の紋章を刻んでもらいはれてフェアリーテイルの一員となった

するとナツがキッドにのほうに近づいてきてこういった

「お前が、電車の中で暴れた赤髪男か？」

「おれあ、キッドだユースタス・キッド、電車？・・・ああハイジヤックのやつか、暴れちゃいねえよただ気に食わなかったから喧嘩しただけだ」

「へえ、俺はナツだナツ・ドラグニル、ところで俺と勝負しねえか？」

ナツはキッドを挑発した

「ちょよ、ちよつとナツやめなさいよ」

と、ルーシィがとめにかかったが

「上等だわざわざやられてーんなら叩きのめしてやるよ」

挑発に乗るキッド

「ああん？やってやんよ！」

「へっ！泣きべそかくなよ」

二人とも完全に喧嘩モードだ

「燃えてきたぞお」

「ムナクソワリイ野郎だぜ」

「もお」はああ

大きくため息をつくルーシイ

フェアリーテイル！（後書き）

駄文はじょじょに直していきたいと思います

ナツVSキッド（前書き）

やっとキッドの技が出てきます

それではどうぞ

ナツVSキッド

ナツとキッドは喧嘩をすることになり、フェアリーテイルの外に出た

「ナツが喧嘩するだつて？」

上半身裸の男性グレイ

「なんだあの赤髪の男は？」

鎧を身にまとった女性エルザ

「へ、何でもいいがサラマンダーあとで俺にもそいつと戦わせろ」

黒髪のロングヘアーの男性ガジル

「俺は何人でも相手してやんよ」

余裕をかますキッド

「がんばれーナツー」

応援を始めるハッピー

「それにしてもあんたの相棒も物好きねえ」

呆れた声でテララに話しかけるシャルル

「テラ、キッドは喧嘩好きなんだよ」

と、こたえるテララ

「そついえば君の名前聞いてなかったね」

今度はハッピーが問いかけた

「僕テララっていうんだよ、君達は？」

「おいらハッピー、ナツの相棒だよ、これからよろしくねテララ」

「私はシャルルよ、あそこにいるウェンディって女の子の相棒よ、これからよろしくね、テララ」

「テラ、こちらこそ、ハッピー、シャルル」

ハッピーたちが交流を深めている中ナツたちは喧嘩を始めようとしていた

「かかってこいよ、つり目ヤロー」

「おめえもつり目だろうが」

と、ようちい口げんかをしていた、周りには、ナツたちの喧嘩を見に来たギルドの仲間たちで、いっぱいだ

「いくぞ！火竜の鉄拳」

そう叫んだとともにキッドに炎に包まれた拳で殴りかろうとした瞬間、キッドの片腕にはそこら中の鉄がくつつきだした、そうしてキッドの腕が鉄の塊に変わったと同時に

「散鉄」

キッドがそう言った瞬間、腕にくつついていた鉄が一気に腕から離れものすごいスピードでナツの方向へ飛んで行った、その鉄の塊はよけることができなかったナツの顔にモロに直撃し、ナツはふつとばされてしまった

「グハッ！」

何とも痛々しい光景とともにナツの苦痛の声が聞こえた

「なんだ今の技は？」

エルザがキッドの技に食いついた

「グッ！奇妙な技使いやがって！」

ナツがさげんだ

「おいおい、そんなもんかよ」

今度はキッドがナツを挑発し始めた

「ふざけんな！火竜の剣角」

全身に炎を身にまとったナツがキッドに向かって体当たりを決めようとしたり、すかさずキッドは自分の腕を横にあげたと思ったらキッドの姿がその場から消えた、ナツはそのまま壁にぶち当たってしまった

「何！？」

驚きを隠せずエルザは声をあげた

「いっつつつつつ、どこ行きやがった」

ナツが頭をさすりながら周りを見回した、すると大きな鉄の壁に手をつけてナツを見ているキッドの姿がそこにあった

「そんなもんかよ」

と鼻で笑って見せるキッド

「くそー、腹立つー、どーなってんだアイツの魔法は!」

ナツは完全にイライラモードに入っていた

「こねーんだったらこっちから行くぞ、鉄腕」

そういったキッドの両腕に多くの鉄がくつつき、両腕が鉄の塊になった

「なんだありゃ!」

思わず声をあげてしまうナツ

そうしてキッドは思いっきり鉄の両腕を振りかぶった

「おらよ!」

掛け声とともにナツに向かってその両腕を振り落とした

「グハアツ!」

ナツは鉄の塊の下敷きになってしまった

「・・・」

しばらく沈黙が続き

「そこまで!!」

マカロフが手を挙げて試合終了の合図を送った

「ふう〜」

キッドが息を大きくはくと、鉄の山をかき分けてナツを引きずり出した、ナツは目をまわして気絶していた

「おーい、大丈夫か?」

キッドはナツを揺さぶった

「・・・」

「たく、もう終わりかよ」

そう言つて、ナツをマカロフに突き出した

「こいつ、のびてるぜ」

グレイはナツの顔を覗き込んだ

「ぬう〜、おぬし何者じゃ?」

マカロフがキッドに問いかけた

「おれはただの喧嘩好きな滅竜魔導士だ」
ドラゴンスレイヤー

キッドは問いに答えた

「!!!」

みんなが驚きの顔でキッドを見た

「んだよ気持ちわりいなあ」

そうつぶやくキッド

「お、お前ホントに滅竜魔導士なのか？」
ドラゴンスレイヤー

震えた声で 그레이 がキッドに問いかけた

「なんで嘘つかなきゃなんねーんだよ」

何食わぬ顔でキッドは答えた

すると、周りでナツ達の喧嘩を見ていたフェアリーテイルのメンバ

ーが一斉に騒ぎ出した

「まじかよ！ウェンディに続き、また一人滅竜魔導士が増えたぞー」
ドラゴンスレイヤー

「うちのギルド最強なんじゃね？」

「これで4人目だ」

「今日は宴だ」

なんて声があちらこちらから聞こえてきた

「なんなんだよこのギルドは」

キッドは呆れた声でいった

「おい、ゴークル！てめー今度は俺と戦えよ！」

ガジルが威勢のいい声で宣戦布告をしてきた

「上等だ、てめえ何て名前だ？」

ガジルに問いかけるキッド

「俺はガジルだ、んなことはどーでもいんだよ、さっさとやんぞ」

「上等だくそやろうがあ」

今度はガジルが喧嘩モードに入った

「ギヒッ！潰してやんよ」

「てめえもムナクソワリイ野郎だなあ、今あ消してやるよお」

ナツVSキッド（後書き）

こんどはガジルVSキッドです

ガジルVSキッド（前書き）

今回はガジルVSキッドです

それではどうぞ

ガジルVSキッド

ナツとの鬪いに引き続き今度はガジルとキッドが戦うことになった
「また、滅竜魔導士^{ドラゴンスレイヤー}VS滅竜魔導士^{ドラゴンスレイヤー}かよ、うちのギルドってホントに多いよな」

少し呆れ気味の声でつぶやくグレイ

「そんなことよりグレイ、服」

ルーシイがグレイにいった

「ん？ぬおっ！いつのまに」

上半身裸のことにきずいたグレイはあわてて服を着た

「お前さつきから鉄を体に付けたり離したり磁石見てえな魔法だな」
ガジルがキッドに話しかける

「おれあ磁竜の滅竜魔導士^{ドラゴンスレイヤー}だ、いわゆる『磁石人間』だ、お前も滅竜魔導士^{ドラゴンスレイヤー}なのか？」

問いに答えるとともに質問するキッド

「はっ！いかれてる魔法だぜ、おれは鉄竜の滅竜魔導士^{ドラゴンスレイヤー}体を鉄に変えることができるんだよ、んなことあどーでもいんだよ、さつさとかってこいよ」

「てめえが聞いてきたんだろうが、くそ野郎が」

また幼稚な口げんかが始まった

「んじゃあいくぞ、おらあ！」

掛け声とともに腕を鉄に変えまっすぐにキッドのほうに伸びてきた、すかさずキッドが手前にを挙げたすると、まっすぐのびていたはずの腕がキッドの数十センチ手前でとまっている

「ぐっ！？うごかねえ」

自分の腕が止まってしまったことに驚いたガジル

「おれあ、体が変幻自在にS極とN極を変えることができんだよ、だからおめえの魔法は俺の前では無力だ」

キッドはニヤツと笑った

「ふざけんじゃねえ、鉄竜剣！」

ガジルのあいてる片方の腕が鉄の剣に変わり、キッドの頭めがけて振り落とされたが、キッドは全く動じずに突っ立っていた、するとまた鉄の剣がキッドの頭から数十センチ手前で止まった

「ッ！！くそがあ！」

ガジルが荒々しい声で叫び再度力を入れた

「何べんやつてもむだなんだよ」

そう言っであいているほうの腕を前に出し、キッドの腕にそこへんの銃や剣などといった鉄類が彼の手にくっついていった

「散鉄」

と、いった瞬間ナツの時と同じようにキッドの腕に付いていた鉄の塊がものすごいスピードでガジルめがけて飛んでいった、ガジルはそれをよけようとしたが

「なに！？」

今度はキッドの手に、自分が鉄に変えた腕がぴたりくっついていて、すかさず戻そうとしたが間に合わず、ガジルもモロにくらってしまい、それとともに、キッドの手のひらにくっついていたはずの手が離れ、そのまま吹っ飛んで行ってしまった、

「厄介な魔法だな」

ガジルはそう呟いた、その時キッドはもう次の攻撃態勢に入っていた、両腕に鉄をくっつけて鉄の塊になっていた。

「今度はこっちから行くぞ」

といって、両腕を大きく振りかぶりガジルの頭めがけて腕を思いっきり下ろした、それをガジルは自分の両腕をクロスさせ何とか受け止めた

「ぐぐぐつつ」

「うおおお！」

二人の競り合いが始まった、どちらも力と力がぶつかり合いで少し火花が散っている

「吹きとべえ！」

キッドがそう叫んだ瞬間、手にくつついいたはずの鉄が一気に腕から離れていきガジルも吹っ飛んで行ってしまった

「くそ、なめやがって」

完全にキッドに押されているガジルは少し腹が立っていた

「あいつ、次、俺とやるときは絶対ぶっ飛ばしてやる！」

さっきまで伸びていたナツが今度は生き生きしてガジルとキッドの戦いを見ていた

「あんた、こりないはねえ」

ルーシーがため息交じりに呆れた声でナツにいった

「それにしてもあのキッドって人、どういう魔法なんだろうかね？」

ウェンディが不思議そうにしている

「鉄をくつつけたり離したりとまるで磁石のようだな」と、推理を始めるエルザ

「おらあかかってこいよ！」

挑発するキッド

「うるせえ、鉄竜の咆哮！」

ガジルは口から鉄の破片を発した

「こりやあでけえなあ」

キッドはのんきにいいながら両腕を前に出したそうしてまた「反発」

キッドはそう叫び、鉄竜の咆哮を抑えている

「かかったな」

ガジルが咆哮の横から顔を出し、咆哮を止めるのにいっぱいいっぱいだったキッドの横腹めがけて鉄竜棍を繰りだした

「ぐうつ！」

さすがこれはとめることができずに声をあげながら吹っ飛んでいく

キッド

「ざまあみやがれ」

ガジルはすまし顔でキッドにいった

「ムナクソワリイ野郎おだぜえ、みせてやるよ、閻魔・磁獄豪手！」
キレ気味の声でキッドは叫び腕をうえにあげた、するとみるみる鉄がキッドの腕にくつついていき大きな腕が出来上がっていった。

「させるか！鉄竜の咆哮！」

ガジルがまた咆哮をしたが、その口から出た鉄の破片はキッドの腕にくつついた

「なに！」

ガジルは思わず驚きの声をあげた

「ほらよ！」

キッドが大きく振りかぶり大きな鉄の腕がガジルめがけて振り落とされた、その面積のでかさにガジルは惜しくもよけることができず、鉄の塊の下敷きになってしまった

「そこまで！」

マカロフが再度腕をあげ勝負のジャツチをした、コキコキと首を鳴らしながらキッドはナツと同様ガジルを鉄の山から引きずり出した、かすかに意識があつたが、動けないのは確かだった

「こんなもんか」

キッドは鼻で笑いガジルをマカロフの前に寝かせた

「おぬし、とんでもないほどのちからじゃのお」

マカロフはほめるようにキッドにいった

「そりゃあんがとよじいさん」

キッドは、軽くお礼を言った

「おめえすげえなあ、うちの滅竜魔導士を二人も倒すなんて、いつ
たい何もんだ？」

グレイがキッドに問いかけた

「だからさっきからいつてんだろつが、ただの喧嘩好きの滅竜魔導
ヤ

士だっつの」

少しキレ気味に答えた

「お前、名前は何と言った？」

今度はエルザが問いかけウェンディが寄ってきた

「おれあキッドだ、ユースタス・キッド、おめえらは？」

聞き返すキッド

「私はエルザだ、エルザ・スカーレット、以後よろしく頼むぞキッド」

「私はウェンディ、ウェンディ・マーベルですよろしくお願いしますキッドさん」

と二人ともほほ笑むように答えた

「ああ」

あいそうなく答えるキッド

「俺はグレイだ、グレイ・フルバスターそれにしてもお前、どんな魔法使うんだ？」

グレイが自己紹介を兼ねてキッドに質問した

「おれは体を変幻自在にS極とN極に変えることができる『磁石人間』だ」

キッドはそう答えた

「じゃあお前磁石食えんのか？」

と、割り込んでナツが質問した

「ああ」

キッドはそう答えた

「そんでもってこいつが俺の相棒のテララだ」

といって近くにいたテララを抱きかかえていった

「テララ」

テララは元気良く返事をした

「お前も猫もってんのか？おれももってるぜ、ハッピー」

ハッピーに声をかけるナツ

「あいさー！」

こちらも元気良く返事をするハッピー

「わたしもいますよ、ねシャルル」

といってシャルルに声をかけた

「ま、そういうことだからよろしく」

あいそうのない挨拶を交わすシャルル

そうしてキッドは、はれてフェアリーテイルにはいることになった

ガジルVSキッド（後書き）

まだまだつづきまーす

フェアリー名物（前書き）

今回はフェアリーテイル名物の宴です

それではどうぞ

フェアリー名物

キッドとテララがフェアリーテイルに入ることにより、今は宴の最中だった

「わたし、ルーシィ、ルーシィ・ハートフィリア、よろしくねキッド」

ルーシィはキッドに自分の自己紹介をした

「ああ・・・お前、どつかでおれとあつたことねえか?」

了解とともに不思議そうにルーシィに問いかける

「ほら、ハイジャックの時の」

ルーシィが答えた

「ああ! あん時のうるせえ金髪女か」

と、思い出したキッド

「誰がうるさい金髪女よ!」

否定を求めるルーシィ

「うるせえじゃねーかよ」

冷静に答えるキッド

「にしても、キッドさんなんでフェアリーテイルに入ろうと思ったんですか?」

不思議そうにウエンディが聞いた

「・・・んなもん理由がなくちゃいけねえのかよ」

キッドは少しウエンディを睨む感じで答えた

「い、いえただ気になったから・・・」

少し弱気になりおろおろするウエンディ

「キッド、そんなに怖い顔しちゃだめだよ」

テララがキッドを落ち着かせた

「・・・」

キッドは少し浮かない顔でだまりこんだ

「・・・？」

それに気づいたウエンディはキッドを不思議そうに見つめていた

「おい！おまえ、ドラゴンスレイヤー滅竜魔導士ってことはドラゴンに教えてもらった
ってことだよな」

ナツが元気いっぱいキッドに問いかけた

「ああ、まあな」

キッドは愛想のない声で答えた

「おまえ、“イグニール”って竜しらねーか？」

ナツが期待を膨らませた声で言った

「“イグニール”？誰だそりゃあ？俺が知ってんのは“キラ”って
竜しか知らねえよ、今はどこにいるかはしらねえがな」

キッドはそう答えた

「もしかしてそれって7年前の777年の7月7日のことか！？」

ナツが食い入るように聞いた

「よく知ってんじゃねえか、深くは覚えてねえが確かそうだったな」
キッドが真剣に答えた

「なんでこんなに7が続いてんだよ！！」

ナツが理不尽に切れた

「しらねえよ！んなもん！！」

キッドがそう答えた

「もお、やめなよナツ」

「テラ、キッドも落ち着こうよ」

二匹の猫が二人を止めた

その後、夜までどんちゃん騒ぎは続き、さっきまで動けなかったガ
ジルの意識がすっかり戻ったと思うと、今度はナツと喧嘩を始めた、
その喧嘩が喧嘩を呼び、またその喧嘩が喧嘩を呼びといったように、
最終的にはフェアリーテイルのだいたい喧嘩をし始めた、

「いつもこんななのか？」

キッドは呆れた声でルーシイに言った

「まあ、だいたいね・・・」

ルーシイがそう答えた瞬間、喧嘩をしていた方向から椅子が飛んできてゴンツ！という鈍い音とともにキッドの頭に直撃した

「ちょ、ちよつと大丈夫？」

ルーシイが心配そうに、大きなタンコブをつくったキッドに言った

「上等だゴラア！片っぱしから叩きのめしてやるよぉ！」

完全に切れたキッドは両腕に鉄の塊をつくり、喧嘩のごたごたの中に飛び込んで行った

「はぁ、結局こうなるのよねえ」

ルーシイが大きなため息をついてそういった

「あい！それがフェアリーテイルです」

「テラッ！」

フェアリー名物（後書き）

終わり方があれですが、誤字、脱字はできるだけ直します

闇ギルド 1（前書き）

どうも、今回はキッドが昔入っていたギルドの話になります

それではどうぞ

闇ギルド 1

「ここでまちがないんだな・・・」

不気味に微笑む男

「ハイここで間違いありません」

それにこたえる部下らしき男

「確実にやつを捕まるぞいいなあ？」

「わかりました」

闇に消えゆく男たちの声

「・・・」

「どうしたんですか？キッドさん」

ウエンデイが真剣な顔で黙りこんでいるキッドに話しかけた

「あ？・・・ああ・・・」

気の抜けた返事を返すキッド

「キッドさん？」

心配そうにウエンデイがキッドの名前呼んだ

（いやな予感がするが・・・まさかここまで嗅ぎつけてきたのか・

・・・んなわけねえか）

「・・・ッド！おいキッド」

深く考え込んでいたキッドにナツが話しかけた

「・・・ああん？なんだよ」

キッドがキレ気味に言った

「なんだよじゃねえだろう、さっきから声掛けてんのにボーっとし
やがって」

ナツもキレ気味に言う

「おめえには関係ねえだろうが」

負けじと言い返すキッド

「んだとゴラア」

「ああん、てめえ叩き潰すぞ」

「やってみるよこのくそゴークル」

「誰がくそゴークルだ、へなちょこ炎」

そんな幼稚な口げんかをしていると

「お前たち！いい加減にしないか」

と、何とも言えないオーラを出しながら二人を止めるエルザ

「あ、あいさ」

震えた声で返事するナツ

「ケツ！」

全く反省の色を見せないキッド

「ナツもナツだが、キッド、どうしたんだ？」

エルザがキッドに聞いた

「ああ？何がだよ？」

全く理解していないキッド

「さっきからボーっとしているが、お前らしくないぞ」

そう問いかけるエルザ

「・・・かんけえねえよ」

少し間を開けて答えるキッド

「関係ないことはない、私たちはお前の仲間だ」

優しい言葉をかけるエルザ

「・・・えんだよ」

小さな声で呟くキッド

「ん？なんだ？」

エルザは聞き返した

「うぜえんだよ！！」

ものすごい剣幕で怒るキッドはそのままギルドを出て行ってしまっ

た、ギルドの中が冷たい空気に包まれた

「ちょ、ちよつとまってよキッド」

テララはキッドの後を追った

「なんだあいつ、らしくねえなあ」
のんきにいうナツ

「でも、なにかかくしごとしているような感じでしたよ」

そう答えるウエンディ

「かくしごと？」

ルーシーがウエンディに聞いた

「はい、なんかずっと黙りこんで、一人で何か抱えているような感じでした」

そう答えるウエンディ

「かくしごとねえ」

少し考えるルーシー

「・・・少し踏み込みすぎたか」

反省するエルザ

「エルザが悪いんじゃないよ」

慰める 그레이

「ああ、ありがとう 그레이」

と、お礼を言うエルザ

（ああ、 그레이様、 ジュビアも慰めてもらいたい）
心の中でそう思う ジュビア

その時だった、ドン！という音とともに扉が開き、そこには一人の男を先頭に後ろには何百人もの武装した男たちがいた・・・

「ねえキッドちょっと言い過ぎじゃない？」

飛び出していったキッドの後を追いかけて、テララはそう言った
「・・・」

全く返事がないキッド

「あのことを考えてたんでしょ、さすがに、あいつらもここまでは付いてこないって」

テララはキッドにそう言った

「・・・」

少し反応したが、全く返事がないキッド

「・・・あのことはキッドが悪いんじゃないんだしさあ、もうもどろうよ、新しいギルドにさあ」

テララは返事がなくても話し続けた

「・・・俺のせいで迷惑かけちまうのはごめんなんだよ」

今まで返事がなかったキッドが初めて口を開いた

「それは・・・」

テララは返す言葉がなかった

「何べん潰しても、しつけないぐらいおってきやがる、俺が行くところとここに必ず現れやがる」

強めの口調で言うキッド

「・・・」

今度はテララが黙り込んでしまった

「・・・それに、俺を探すためなら何でもするやつらだ、ギルドにめえわくかけるかもしれないねえだろうが」

キッドはそう言った

「じゃあなんでキッドはフェアリーテイルに入っただの？」

核心を突くテララ

「・・・」

返す言葉がないキッド

「そんなことまで考えてたんだったら、なんでキッドはフェアリーテイルに入っただんだよ！」

少し強い口調で言うテララ

「・・・」

また黙り込むキッド

「どうでもいいギルドだったから？違っだろ！初めて信じる事ができたギルドだったからだろ！」

テララは徐々に声が震えていった

「・・・」

キッドは黙っていたながらも少し反応していた

「初めて納得できて、初めていい思いができて、初めて信じる事ができて、初めて本当の喧嘩ができたからだろ！」

完全に声が震え涙目になっているテララ

「・・・」

「だから・・・だから・・・グスッ」

「・・・」

「帰ろうよ！僕らのギルドにさあ！！」

泣きながら言い切るテララ

「・・・たく」

やっと口を開いたキッド

「男がピーピー泣いてんじゃねえよ、さっさと帰るぞ」

そっぴいながら、テララの頭を乱暴に撫でるキッド

「うん！」

涙をこすりながら満点の笑みでこたえるテララ

「少しは、ましなことと言えるようになったじゃねえか」

キッドはポツリとつぶやいた

「え？なに？」

テララは鼻をすすりながらキッドに言った

「何でもねえよ」

そんな会話をしながらキッドたちは自分たちのギルドに帰っていった

闇ギルド 1 (後書き)

まだつづきまーす

闇ギルド2（前書き）

今回は、闇ギルド1の続きです

それではどうぞ

闇ギルド2

時はさかのぼりフェアリーテイル

「このマスターは誰だ」

先頭に立っている男がそう言い放った

「マスターは今、出かけているの、要件だったら私が聞くわ」

ミラが男に向かってそう言った

「そうか・・・ここにキッドという男はいないか？隠すとひどいぞ
お」

男はミラを脅した

「ミラ、下がっている、私が相手する」

今度はエルザが出てきた

「貴様らは何者だ、闇ギルドか？」

エルザは男に向かって言った

「質問しているのは俺だ、さっさと答えろ」

男は少しキレ気味に言った

「確かにキッドはこのギルドだが、それがどうした」

エルザは質問に答えた

「今どこにいる？」

男がまた質問した

「どこのやからかも分からん奴らになぜそんなことを教えなくては
ならない？」

エルザは対抗した

「ほお、逆らうというのか？」

「だったらなんだ？」

両者のにらみ合いが続いた

「ふっ、ならばよかるう、後悔させてやるる！殺れお前たち！」

男がそう言った瞬間武装した数百人も男たちがギルドに攻め込ん
できた

「皆のものの引き締めてかかるぞ!!」

エルザも負けじとギルドの指揮をとった

「うおおおお、燃えてきたぞお」

ナツが素晴らしいながら片っぱしから男たちを潰しにかかった、さすがの闇ギルドとはいっても、名知れているギルドの一つであるフェアリーテイルには歯が立たなかったたらしく、数がどんどん減っていく、だがその数にはきりがなく、倒しても倒しても次のやつがどんどん出てくる

「ほお、やるじゃねえかあ」

男はその光景を見ながらも落ち着いていた

「そんなことをいつてられるのも今のうちだ、換装！」

そういつてエルザは天輪の鎧に変化した

「へえー俺とやろうつてか、上等だ、お前名前は？」

男の右手に黒刀が出てきた

「エルザだ、貴様は？そしてお前たちの目的はなんだ？」

エルザが男に聞き返した

「俺は、リユーマだ、俺たちはマスターの命令にただしたがっているだけだ」

リユーマはそう答えた

「キッドを捕まえてどうする気なんだ？」

エルザは質問を続けた

「んなもん俺が知ったこっちゃねえよ」

そういつてリユーマは黒刀をさやから出しエルザに突きをかました、それに反応したエルザは両手に持っている剣をクロスさせ、なんとかガードした

「ほお、なかなかやるじゃねえかあ」

「ふざけるな！」

エルザは自分の後ろに複数の剣を出現させた

「行け！剣たちよ」

そう言った瞬間エルザが出した剣達がリユーマにめがけて一気に向かっていった、が、リユーマはそれをすべてあっさりとよけてしまった

「おせえなあ」

リユーマは余裕だった

「バカな、あれほどの数の剣をよけただと！」

エルザは驚いた

「くっはっはっは、剣は数じゃねえよ、早さだ」

そう笑いながらリユーマは刀を横に振った、するとエルザの横腹が急に切れ、血が飛び出した

「グッ?!」

エルザが声をあげ膝をついた

（まったくみえなかった・・・しかも鎧を貫いただと!?!）

「くっはっはっは、どうだ？悔しいか？」

エルザをあおるリユーマ

「うるさい！」

そういつて、エルザは、リユーマの365°に剣を出現させた。逃げる隙間など少しもない

「ほお、こりやげえなあ」

危機にもかかわらず余裕をかますリユーマ

「ふざけるな！」

エルザはそう言った瞬間リユーマ中心に剣を突き刺した、はずだった「だからおせえんだっつ」

「！」

さっきまで複数の剣の中心にいたはずのリユーマがエルザのすぐ後ろにいた

「あばよ、妖精女王」
テイターニア

そういつて刀を振り下ろそうとしたその時だった
横から鉄の塊が飛んできてリユーマは吹っ飛んでいった

「うちのもんに手え出してんじゃねえよ」

さつき、出ていったキッドがそこに立っていた

「キッド、お前！戻って来てたのか」

エルザはキッドにそう言った

「勘違いすんな、テララが帰ってえって聞かねえから帰ってきたんだよ」

キッドは、照れ隠ししながらそう言った

「もお、キッドホントのこと言おうよ」

「ホントのことだろおが！」

テララのボケに突っ込むキッド

「お前たち！今は戦いに集中せんか！」

エルザがついにキレた

「テ、テラ」

「ハッ」

キッドとテララがそう答えた

「おうキッド、久しぶりじゃねえか」

そう言つてさつき飛ばされたはずのリユーマはピンピンしながらキッドに話しかけた

「……誰だてめえ？」

その場が一瞬こりついた

「テ、テメーお約束守ってんじゃねえよ」

リユーマがそう突っ込んだ

「いや、マジでおめえだれだ？」

「もおいしい!!」

完全にキッドの頭からなかったリユーマ

「なんとなくだけどキッドが若干押してる・・・」

テララがそう呟いた

「んなことより、俺のギルドをこんなにしやがって、てめえらタダで済むと思うなよ」

キッドは完全に今の現状にキレていた

「はっ！それが自分のせいだったらせわねえなあ」

リユーマがそういった

「!・・・てめえらマジで動きだしたのか」

キッドは少し落ち着き、リユーマに聞いた

「おいおいキッド、まさかマスターの性格を忘れたなんて言わせやしねえぜ、なんたって何年もお前のことを追い続けたんだからなあ」

リユーマはそう言いながら剣先をキッドに向けた

「・・・ムナクソワリイ野郎だぜえ、てめえらあ、ここに手え出したこと後悔させてやるよ」

そういつてキッドの両腕に鉄がくつつきだし、みるみる大きな鉄の塊になった

「・・・キッド」

エルザはそう呟いた

「磁竜の散鉄!」

キッドがそう言った瞬間片腕の鉄の塊がリユーマに向かって飛んで行った

「おそい!」

そう言つてリユーマはそれを軽々とよけた、そして肉眼ではとら

えられない速さで、キッドに突きを炸裂したが、

「・・・そういやあおめえには刀が聞かなかったのか」

リューマの刀はキッドの数センチ手前で小刻みに震えながら止まっていた

「ほお、初めて会ったのには詳しいじゃねえか、おらよ!!」

そういつてキッドはもう片方の鉄がくつついているほうの腕をリューマに振り落とした、だが、ぎりぎりリューマはそれを後ろによけた
「ちょこまかとお」

そういつて、キッドはリューマの刀をひきつけた

「え!?! ちよつ、待て!」

刀をがっちりつかんでいるリューマはそのまま刀と一緒にものすごいスピードでキッドのもとにひきつけられ

「フンッ!!」

キッドは刀と一緒に飛んでくるリューマをタイミング良く踏みつけた

「フガア!」

リューマはそのまま地面にたたきつけられた

「ハッ! じつとしゃがれ」

そうリューマに怒鳴りつけたキッド

「て、てめえ、きたねえまねしてんじゃねえよ」

そういつて、ふらふらとたちあがるリューマ

「そこまでじゃ!!」

どこからか声が聞こえた、その声の主は

「じつちゃん! どこ行つてたんだよ」

マカロフだった

「ウム、ちよつと評議員によつがあつてのお」

ナツの質問に答えるマカロフ

「それにしても貴様らは・・・闇ギルドじゃな」

マカロフはよれよれのリューマに向かってそう言った

「ああん？じじいだったらなんだってんだよ！」

ガラが悪そうにリューマはマカロフに逆らった、するとマカロフは「貴様らのマスターによく伝えておけ！今度わしの家族に手を出したら、タダじゃすまぬとなー！」

いつものマカロフではなく、全く違うオーラを出しながらリューマを睨みつけるマカロフ、その姿には、その場にいた全員がゾクツとした

「クツ！・・・おい！野郎ども帰るぞ！」

リューマがそういって、男たちは、倒れた仲間をおぶりながらフェアリーテイルを後にした

闇ギルド2（後書き）

もっちゃんとうっぴんがーす

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2883ba/>

磁竜の滅竜魔導士

2012年1月14日17時56分発行